

うさぎと進化論

福田浩尚

日曜日の大河ドラマの前に「ダーウィンが来た」と言うテレビ番組があり結構面白い。先日（六月終わりの週）には、イギリス野原に棲むうさぎがテーマとなつて考えさせられるものがあつた。イギリスはピーターラビットが有名だが、説明によるとこのうさぎは、少し種類がちがい大型のものらしい。イギリスという国土は、全体がゴルフ場のような状態で野原が広がつていて高い山や大きな河はないという。こんな草原地帯にあちこちに穴を掘つてうさぎが集団で生活しているのである。テレビでは大型のうさぎが、お互いに向き合つてボクシングよろしく猛烈な殴り合いをやっている。そばでもう一匹のうさぎがこの闘いを観戦しているのである。この打ち合いはすさまじい。うさぎは大きいからカンガルーのようにも見える。カンガルーのボクシングはみたことがあるが、それにもまして激しい。そこからは、普段我々が感ずるうさぎの可愛らしさなどはみじんも感じられない。なにか、恐ろしさを感じるほどである。

これは、うさぎの雄どうしが雌を得るための壮絶な闘いなのである。闘いはどちらかがギブアップして背を向けて逃げるまで続く。双方とも必死で闘いはかなりの時間続く。その間、雌のほうはどちらが勝つか腕組みをして（まさか）見物だ。やがて、決着がつき、今度は勝ったほうの雄が雌にむかって求愛のため向かってくる。ところが、あにはからんや、雌のほうもすぐに雄を受け容れるということはしない。勝った雄に対して今度は雌がパンチを食らわし、またひとわたりボクシングが始まる。これは雌のほうか、本当にこの雄は自分の伴侶とすべき力を持っているのかどうか見極めるのだという。もしかして、先ほどの試合が、雄どうしの八百長だったかもしれない。ここで、ようやく、雄の強さを確認して強い伴侶を決めるのである。強い種族を残すために進化の過程で得た本能と見える。こうして、野うさぎは、イギリスのこの平原地帯で繁殖を続け生きながらえてきたというのである。

私は、このテレビを見て、「ああ、私はうさぎでなくてよかった、人間であってよかった」と言うのが第一印象であった。先ずは闘いの最中の雄うさぎの気迫に圧倒される。いかに種族の繁栄とはいえここまで命懸けで闘う

ことが私にはできるだろうか。こうして人間のはしぐれに加えてもらっているからこそ、この気弱の私でも、順風満帆とはいかないまでも、なんとか雌を得てそれなりの生活を送ることができた。おそらく、負けたほうのうさぎのその後の人生（兎生）を想像すると、うさぎに生まれたらの自分と重なってなにか気の毒になって気さえる。

しかし、このように強い雄が種族を支配するということはなにもうさぎに限ったことではなさそうだ。猿やゴリラにもこれに似た行為がある。雌をえるために雄どうし

3

が壮絶な闘いをし結局強い者が残って群れの長となり大勢の雌を従えて社会を構成するということをもた別のテレビかなにかで見た記憶がある。敗れたほうの雄は弱者としておそらくその後は過酷な生活が待っていることになるだろう。ゴリラは人類の祖先であるとするならば、おそらく人間社会にあっても、かなり古い時代はこのようなものであったろうと想像できる。ある一部の社会では一夫多妻制が残っている。また、権力者が後宮の華麗3000人をかかえたり、大奥のようなものも、強い男性が女性を支配するのが社会のおきてなのだという本能の

名残りなのかもしれない。

不思議に思うのが女性の権力者が多くの男性を抱え込むというのが歴史的にあまり見当たらない。女性の権力者というのがちよつと例が少ないのでなんとも言えないが、中国、唐の則天武后、あるいは清末の西太后にしろあれほどの権力者でありながら後宮に多くの男を住ませたということは聞いたことがないしおそらくなかったと思う。男と女は本能的に発想がちがうのかもしれない。これは余談・・・。

とにかく、私のような闘う気構えも根性も能力もない部類に入るものとしては、こうして今、人間であることは幸せなことである。人間も、もともとはあの野うさぎやゴリラのような強い雄が支配する子孫を維持し社会を維持するための弱肉強食社会であったことは想像にかたくない。いつから人間はいまのような状況になったのであろう。人類には転機があつた。人間がいつから、あのうさぎのボクシング行為やらゴリラの集団生活から変化したのか、今、こうして恩恵を受けている私としてはなんとんでも答えが欲しい問題である。なかなか回答は難しそうであるが、どうも人間の脳の発達と心に原因があ

るような気がする。人は、いつかなにかのきっかけでこんなボクシング行為が馬鹿々しいことに気づいたに違いない。私の考えついたことはこうである。一番重要なことは、人間にとって他人に対する思いやりの精神が生まれてきたことにあるのではなからうか。あるいは、他人とシェヤーすることを学んだことにあるのではなからうか。どちらが先か後か、あるいは同時か分らない。なにも一番の雌でなくてもよい、二番目でもよい、いや雌であれば誰でもいい（これは、ちよつと言い過ぎ・・・）。こうして、他人に譲ることがすぐく心地よく崇高な行為にすら思えるようになったのではなからうか。

一方、経済生活にあつては、バカバカしいボクシングの闘いをしなくて済む分、他のもつと有効なことに時間と労働力を向けることができる。農耕を覚えることによつて、余裕も生まれてきたのだらう。お互いに譲り合う精神と分け合う気持ちが生まれてきたのだらうと思う。互惠の精神である。更に、人々は今までの集団生活に加え家庭を持つことを学んだ。この後、人間の社会生活における基本は家庭になる。このことは、人類の進化にとつて大きかった。発展が加速したと言つてよい。ここまですれば、もう大丈夫・・・。

いま、ボクシングにうつつを抜かしているイギリスの
うさぎをみて思う。

「いつまでも、そんな馬鹿なことをやってるから、そんな
荒野に穴を掘って生きてる生活しかできないんだ。ざ
まあみやがれ・・・」

終わり

2011年6月